

静岡県立大学短期大学部

研究紀要 12 - 3号 (1998年度) - 6

The Marble Faun のロマンス性
ドナテロの龍退治

鈴木元子

The Marble Faun as a Romance
–Donatello's Dragon Killing–

SUZUKI, Motoko

Nathaniel Hawthorne の最後の長編 *The Marble Faun*¹ は、*The Scarlet Letter* や他の短編のように、ニューイングランドのピューリタン社会を背景にしているものではない。むしろ、彼にとっては挑戦すべき、未知なる世界であるヨーロッパ大陸のローマを舞台にしているのである。ローマは、当時の若いアメリカ、歴史のないアメリカとは逆に、歴史のある重層的世界の代表・象徴とも言える場所であった。神話的・宗教的背景も単一なるものではない旧世界。そこに、ホーソーンは惹かれたのであろう。彼の *The Marble Faun* 冒頭の次の言葉が印象的である。

We glance hastily at these things—at this bright sky, and those blue, distant mountains, and at the ruins, Etruscan, Roman, Christian, venerable with a threefold antiquity, and at the company of world-famous statues in the saloon—in the hope of putting the reader into that state of feeling which is experienced oftenest at Rome. . . . Side by side with the massiveness of the Roman Past, all matters, that we handle or dream of, now-a-days, look evanescent and visionary alike. (6)

このロマンスの中に名前が挙げられている神話的人物も、アダム、イブに限

らず、ヴィーナス、キュービット、バックス、ニンフ、フォーン、サチュロス、パン、アポロといったギリシャ神話の神々である。そこで、R. W. B. Lewis がかつて *The American Adam*ⁱⁱ で、このロマンスをアダムとイブの冒険物語で、「救い」(salvation) をテーマにした逃亡と回帰の物語であると書いていたのを思い出す。むしろ墮落物語をも包含するような、もっと大きな神話のパラダイムの中でこそ、この作品のロマンス性が語られるべきではないだろうか。

そこで、この小論においては、Northrop Frye の神話批評 *Anatomy of Criticism* (1957)ⁱⁱⁱ の第三エッセイ “Archetypal Criticism: Theory of Myths” を基軸に、*The Marble Faun* の分析と解釈を試みることにする。

Henry James は、かつて *The Marble Faun* について、“Like all of Hawthorne’s things, it contains a great many light threads of symbolism, which shimmer in the texture of the tale, but which are apt to break and remain in our fingers if we attempt to handle them.”^{iv}と述べたが、その光る糸を少しでも切らずに取り出してみたいものである。

また、ジェームズは、ホーソーンのこの作品について、主に次の三点について指摘している。第一点は、“The fault of *Transformation* is that the element of the unreal is pushed too far, and that the book is neither positively of one category nor of another”^vと非現実の要素が多すぎるのでどのカテゴリーの書か分からないと苦情を呈し、第二点として、“I think it a pity that the author should not have made him more definitely modern”^{vi}と現代人ドナテロを提案し、第三には、“The story straggles and wanders, is dropped and taken up again, and towards the close lapses into an almost fatal vagueness.”^{vii}と語りの技術が劣っていることを指摘している。しかしながら、この作品をドナテロの龍退治モチーフを内在させたロマンスであると解するならば、どうだろうか。ジェームズのこれらの指摘も解けていくはずである。

1. 主人公の誕生

ロマンスには六つの相がある。第一の相は、英雄（主人公）誕生の神話である。フライによれば、ロマンスの主人公には神のような性格が付与されており、神話の救世主や上界から訪れる解放者に類似しているという。そして、この英雄（主人公）は、春、黎明、秩序、豊饒、活力、若さなどに連想されるものである。

まず、このような定義のもとに考察すると、主人公ドナテロ^{viii}は不思議なことに、この定義に合致するのである。彼は動物的な生命力に溢れ、永遠の若さを有し、単純無垢で、一人前の大人でも、子供でもなく、人間が到達した発

達段階に未だ至らない半身動物・半身人間のような存在と叙述されている。原人間のように、未だ上界と繋がっているような人物である。ローマ在住の芸術家たちにプラクシテレスの牧神像そっくりだと言われるが、これは木の葉型に先が尖った耳を持つ神話的動物とされている。ドナテロの耳の形については、最後まで真相が明かされていないけれども、ホーソンが意図的に彼を現実界（人間）と、想像界（神話的生き物）の中間に位置づけているのは明白である。

ドナテロの生い立ちについては、12章のケニヨンの言葉にこうある。

“Why, my dear Hilda, he is a Tuscan born, of an old, noble race in that part of Italy; and he has a moss-grown tower among the Apennines, where he and his forefathers have dwelt, under their own vines and fig-trees, from an unknown antiquity.” (103)

“Speaking in no harsh sense, there is a great deal of animal nature in him; as if he had been born in the woods, and had run wild, all his childhood, and were as yet but imperfectly domesticated.” (104)

一族はアルカディアの森（アペニン山地の奥）に住み、森の洞窟や木陰でニンフたちとかくれんぼをして戯れた牧神族唯一の生き残りと言われている。ドナテロはその末裔として、しかも数百年に一人生まれるモンテ・ベニ族最後の人間として描出されている。その他、ドナテロの故郷描写に出てくる「ぶどう」「いちじく」「オリーブ」「泉」^{ix}は、聖書の中に出てくる重要な象徴表現とも一致するものである。

この自然（理想郷）と神秘的な繋がりをもつ青年ドナテロが、ローマ^xに上京したところから、この作品は始まる。

2. 無垢なる青春

第二の相は、英雄と無垢の青春との出会いである。ドナテロがローマに来て恋に落ちた相手は、魅力溢れる美女ミリアムであった。妖精めいた印象を持ち、黒い眼にユダヤ女性特有の豊かな黒髪を持つ美女である。ドナテロの“I have only lived since I met you.” (15) の言葉が示すように、彼女と出会ったその瞬間から主人公にとって時間が運行し始め、彼は自分の人生を生き始めたのである。

神話の英雄が恋に陥るのは、常に美しい王女と決まっている。ここでも、確

かにミリアムには王女のイメージが付与されている。彼女の素性は謎に満ちていたが、その豊かさの印象から、“a German princess”と見なされ、国家的理由のために、よぼよぼの君主か、まだほんの子供の皇太子に嫁がせられるところを逃げてきたという噂さえ広まっていた。また、次のよううわさも流れていた。

He remembered the gossip so prevalent in Rome, on Miriam's first appearance; how that she was no real artist, but the daughter of an illustrious or golden lineage, who was merely playing at necessity; mingling with human struggle for her pastime; stepping out of her native sphere, only for an interlude, just as a princess might alight from her gilded equipage to go on foot through a rustic lane. (397)

どちらにしても、お姫さまのイメージはしっかりと付与されている。

しかしその一方で、ホーソーンのロマンスらしく、この王女は悲しみに充ちた不幸な王女とも記されている。“Captive queen”とも言われているように、過去と罪責感に囚われている王女だというのである。

しかし、ドナテロはミリアムを崇拜し、彼女の謎や悲しげな暗い影の部分についても、“Shroud yourself in what gloom you will, I must needs follow you.” (50) と、彼女への愛を貫く決意を明らかにする。そして、人間の美しい娘に人目ぼれした彼の先祖のように、ドナテロは無垢なる青春を楽しもうとするのである。

ボルゲーゼ公園で、ドナテロは葉の生い茂った高い木に登ってミリアムを待ち、彼女がやってくるのが分かったと、枝葉の間を下に降り、横枝から彼女の傍らにひょいと飛び降りるなど、まことに森の牧神らしい。彼が独特な声で呼びかけると、小鳥が友達をみつけたように、彼の頭上にやってくる。公園でドナテロとミリアムがはかなくも戯れる姿に、アルカディアが戻ってきたかのようにであった。“They played together like children, or creatures of immortal youth; . . .”(83) “Setting apart only this, Miriam resembled a Nymph, as much as Donatello did a Faun.”(85) ドナテロが牧神を演じれば、ミリアムは森の精に見えた。それも泉の底から現れた水の精で、日光を浴びたら、すぐにも虹の水しぶきの中に消えていってしまいそうだった。

そのような青春に出会えた主人公であったが、しかし、彼の初恋は到底実りそうにはなかった。周囲の者たちには、二人の格差が大きすぎるように映った。また、ミリアムの後について回っているのは、ドナテロだけではなかった。

3 . 探究

ロマンスに文学的形式を与える要素である冒険は、探究とも呼ばれる。危険な旅行や、準備段階の小冒険(「アゴン」つまり相克)、次に命をかけた闘争(「パトス」つまり死の闘争、主人公か敵のうちの一方あるいは双方が死ななければならぬような闘い)、そして最後に凱歌(「アナグリノシス」つまり発見、認知)から成る。

この第三の相である探究の主題は、『黄金伝説』の聖ジョージやペルセウスの物語、『ベオウルフ』に代表される「龍退治」の主題と重なり合う。無力な年老いた王様に統治されている国が海の獣によって蹂躪され、若い女性が次から次へと人身御供に差し出されて食われていく。そのうち王女の番が回ってくる。折りしも英雄が現れ、龍を退治すると、王女と結婚して王位を継ぐという物語である。

英雄の敵については、冬、暗闇、混乱、不毛、病んだ生、老齢などに連想されるものである。敵は悪魔的な性格を帯び、下界のサタン同様の力をもつ。

そこで、このモチーフを *The Marble Faun* の中に当てはめてみると、「英雄(主人公)ドナテロ、龍(悪魔)アントニオ^{xi}、王女ミリアム」の構図がしっかりと出来上がっているのを発見し、驚愕する。

神話批評では、「神界、人間界、動物界、植物界、鉱物界」が、神話の舞台装置として各々の意味を持つと理解する。たとえば、フライはカタコンベが、神の大道の対極に位置する迷路・迷宮(中心にミノタウロスのような怪物が住む方位感覚喪失の象徴)を意味すると言う。そのカタコンベが、ホーソーンはこの作品の中では、非常に有効に用いられているのである。

The labyrinthine wanderings of Israel in the desert, repeated by Jesus when in the company of the devil (or “wild beasts,” according to Mark), fit the same pattern. The labyrinth can also be a sinister forest, as in *Comus*. The catacombs are effectively used in the same context in *The Marble Faun*, and of course in a further concentration of metaphor, the maze would become the winding entrails inside the sinister monster himself.^{xii}

モデル・アントニオは、ちょうどそのカタコンベから姿を現わす。ドナテロが推定年齢 2500 才の不死身の神話的存在であると記されている一方、アントニオもそれに劣らず、水面に影の映らない人影、亡霊で、大地のはらわたである地下埋葬所の中を 1500 年もさ迷って聖人の魂を売ろうとした悪霊(異教徒

の亡霊)と描出されている如しである。彼は、カタコンベのガイドが語るメミウス伝説の悪魔と同一視され、徐々に同一化されていく人物でもある。

In the midst of its madness and riot, Miriam found herself suddenly confronted by a strange figure that shook its fantastic garments in the air, and pranced before her on its tiptoes, almost vying with the agility of Donatello himself. It was the Model. (89)

ミリアムの右側に自然児ドナテロがつくと、ミリアムの左側には悪魔アントニオがつくという対称的構図がちゃんと読者の眼前に呈示されるのである。公園で、ドナテロがフーン、ミリアムがニンフのように踊って、その場がアルカディアと化すと、突然ミリアムはドナテロにこう告知する：“Your hour is past; his hour has come!” (90) すると、その途端アルカディアは陰気な暗闇の世界へと一変する。

“That iron chain, of which some of the massive links were round her feminine waist, and the others in his ruthless hand. . . .” (93) こんな表現さえある。美女は息もできない。かつて、ミリアムは友人のケニヨンに助けを求めたが、冷たく拒絶されるのみであった。彼女にとって唯一頼れる相手は、今やドナテロしかいない。結局、彼は龍退治を三度心に意識する。(「三」という数字も神話的に意味のある数字である)。一度目はボルケーゼ公園で、動物的に激怒し、ミリアムに問いただしたこともある。

“Shall I clutch him by the throat?” whispered Donatello, with a savage scowl. “Bid me do so; and we are rid of him forever!” (91)

二度目は噴水のそばであったが、ドナテロは怒りに燃えて迫った。

“Bid me drown him!” whispered he, shuddering between rage and horrible disgust. “You shall hear his death-gurggle in another instant!” (148)

しかし、この時もミリアムの許可は得られなかった。ドナテロは女主人の “a faithful hound” (148)^{xiii}として、彼女の承認がなければ手を出せなかった。

そして、三度目が崖の上にいる時であった。アントニオが罪を犯そうという気持ちから彼女の後をつまわし、そして害意^{xiv}をもって近づいていった、ちょうどその時だった。この時ミリアムは息もつまり、思考の流れは麻痺して、

あの悪魔に跪いていさえた。このかよわき女性の危機にあって、ドナテロが怪龍に立ち向かわないはずがない。この時、ミリアムの正常な思考が止まっていたことが幸いしたのか、彼女の本音がその眼差しに現れたらしい。すなわち憎悪と勝利と復讐と、それに何か思いがけない解放感と喜びとを含んだ眼差しがドナテロに投げられた、と彼は理解したのである。そこで、この是認の眼差しを受けて、ドナテロはアントニオをついに崖下に投げ落としてしまう。

最初、このドナテロの行為は、何かヒーロー的なものとして描かれている。何故なら、古代ローマにおいては、この崖から投げ落とされた政治犯たちは世に害悪をもたらした人達であったと、すでに伏線で語られているからである。ミリアムも言う：“Innocent persons were saved by the destruction of a guilty one, who deserved his doom.”(170)

そして、アントニオが怪龍の役割を担わせられていることも、すでに 15 章で伏線として読者の心に刻みつけられていたのである。素描集にある一枚の絵には、“a winged figure with a drawn sword, and a dragon, or a demon, prostrate at his feet” (139)の絵が描かれていた。このスケッチには、完成画よりもずっと精力的な悪魔が描かれていて、ケニヨンも驚いたほどである。“What a spirit is conveyed into the ugliness of this strong, writhing, squirming dragon, under the Archangel’s foot!” (140) そして、彼が見覚えのある顔だと言い出すと、ヒルダもミリアムもやはり誰かに似ていると思いがたる。そこで、ドナテロがその純粹さと動物的直感から、その怪龍がモデル・アントニオに似ていると発言して、皆も同感するのである。

巨龍と悪魔が同一物と考えられていることについては、新約聖書の「ヨハネの黙示録」12章9節の聖句による。“And the great dragon was cast out, that old serpent, called the Devil, and Satan, which deceiveth the whole world: he was cast out into the earth,”

非キリスト教的探究ロマンスの場合、死の闘争後に報償が与えられ、それは、力、知恵、花嫁（報償が王女の場合には権力と女性の両方を手に入れることになる）であることが多い。また、探究の旅から持ち帰った宝、或いは、探究の結果、目にしたり、手に触れたりすることができる貴重な品々もある（例えば、聖杯など）。

The Marble Faun においても、龍退治によって、ドナテロはまずミリアムを報償として受け取る。どういう意味かということ、初め、ドナテロの求愛は誰が見ても身のほど知らずのものであったのが、龍退治以後は、彼の勇敢な行為に対して、ミリアムの心は急激な変化を遂げて、自らの愛と献身とを彼に差し出すまでに変わってしまうのである。ミリアムの目に、軽薄で、無知な自然児と映っていたドナテロが、この龍退治以来、威厳を帯びた存在に変化するの

ある。

4 . アイロニカルなパラドックス

神話批評によれば、闘いに勝利し、報償をもらえば、これでめでたし、めでたしと無事終わるのであるが、*The Marble Faun* は、そんなに容易には終曲を迎えない。つまり、“the Messianic hero as a redeemer of society”^{xv}のはずが、それを一旦は認めながらも、ホーソーンはそれをまた大逆転させてしまうからである。すなわち、ロマンスでは悪漢を倒した勝利者、救い主、贖罪者ドナテロであるはずなのに、今度は、彼に殺人者というレッテルを貼ってしまうからである。つまり、龍退治の神話モチーフが完結するやいなや、巡礼モチーフが待ちうけているという有様である。ミリアムがいくら、「私達の行為は、犯罪ではありません。二人の命を永遠に結合するために、もう一人の無価値で卑劣な命が犠牲にされたというだけのことです」と叫んでみても、今やその言葉は、空ろに響くだけである。ドナテロが手に入れたのは、王女より、むしろ「罪と悲しみ」の方であったというのが、ホーソーン独特の文学世界であるからである。

5 . 沈思

罪と悲しみを初めて認識したドナテロに、ミリアムは故郷のアペニン山に帰ることを勧める。故郷に帰れば、ローマでの出来事を悪夢として忘れることができるかもしれない。そこで、傷ついた英雄（ホーソーン流には「罪人」）は、癒しを求めて無垢の世界、すなわち子宮への回帰を促される。その古い荘園は城のような建物で、広い谷間を見下ろす灰色の塔があり、その頂上がドナテロの部屋であった。

フライによれば、塔は下界と天界を結ぶ所であるが、ナレーターの語りによれば、ここは昔“a prisoner’s cell”であったという。入口の広間も、石造りのエトルリアの墓と間違ふほどである。今や、ドナテロは完全に変貌していた。軽く踊るような足取りは、重々しい一定の歩調となり、陽気さは陰気さに、若々しさはローマでの経験を経、三十年の辛苦を舐めたかのように失われていた。無邪気さも大分消失したが、激情を抑制する能力を身につけ始めていた。歓楽のための広間は礼拝堂と化し、それをケニヨンは成長・進歩と評するが、確かにドナテロは悔い改めと内省の沈思の時を持っていたのである。

友人であるはずの自然も、今や彼を避け始め、彼を罪人と断罪しているかのようであった。

“They know it!” repeated Donatello trembling. “They shun me! All Nature shrinks from me, and shudders at me! I live in the midst of a curse, that hems me round with a circle of fire! No innocent thing can come near me!” (249)

The Marble Faun の副題は、*The Romance of Monte Beni* である。モンテ・ベニ家の祖先のある騎士は泉のニンフに恋をし、彼が呼べばニンフは現れたという。ところが、ある日、罪を犯し、血の汚れを落としに泉に来ると、呼んでもニンフは現れず、最後に見た彼女の顔の額には、血痕がついていたという。ドナテロの部屋の中に置いてある磔刑像の下方にある頭蓋骨は、泉の乙女を愛したが血の汚れのために、彼女を失ったこの騎士の頭蓋骨の写しであった。一生涯、罪の意識に苛まれた騎士が、自分の形見にと子孫に残していったもので、それを見て、永遠や快樂の対極にあるものについて思索せよ、と警告を発しているのである。この騎士は、殺人罪を犯したドナテロの雛形になっている。28章の小見出しの“The Owl-Tower”には、魂の靈的経験の含みがある。

Or, let us rather say, with its difficult steps, and the dark prison-cells you speak of, your tower resembles the spiritual experience of many a sinful soul, which, nevertheless, may struggle upward into the pure air and light of Heaven, at last. (253)

ドナテロは梟の塔に閉じこもり、寝ずの行という償罪行為をしつつ、苦しみながらも魂をわがものにしようとしていた。眠っていた知力は活動を開始し、思索の世界が彼の心の視野に姿を現わしつつあった。ドナテロは無垢の世界の統一性を守りながら（第四相）、塔の部屋という一段と高い所から経験世界を眺め、田園詩的な見方をするようになる（第五相）。塔の中の隠者としてケニヨンと相手に、モンテ・ベニ家の伝説と彼自身のことが認知されていく（第六相）。

6 . 巡礼の旅

ケニヨンは、孤独がドナテロに対する役目を果たしたことを読み取ると、今度は旅に伴う冒険と境遇の変化、そして女性の助けや支えが彼のためになる時期だと判断して、あてもない旅に誘う。ドナテロ自身もこの目的のない旅を、悔悛の巡礼小旅行にしようとしていた。小さい祭壇の前では、馬を下りて跪く

と十字を切り、短い祈りを唱え、路上の十字架に行き会っていると、また跪き、十字架に口づけをして、その根本に額を押し当ててのだった。

このようにして辿り着いたのが、ペルジアの教皇ユリウス三世の銅像の前である。この銅像による祝福に希望を託したミリアムが、ケニヨンに提案したことであるが、ユリウス像の祝福は、教皇の祝福というよりも、イエスによる贖いの表徴となっている。聖書の予型論的解釈では、イエスの予型は、旧約聖書にある青銅のヘビである。聖書にはこう記されてある。

And the LORD said unto Moses, Make thee a fiery serpent, and set it upon a pole: and it shall come to pass, that every one that is bitten, when he looketh upon it, shall live. And Moses made a serpent of brass, and put it upon a pole; and it came to pass, that if a serpent had bitten any man, when he beheld the serpent of brass, he lived. (KJV, Numbers 21:8-9)

And as Moses lifted up the serpent in the wilderness, even so must the Son of man be lifted up: that whosoever believeth in him should not perish, but have eternal life. (KJV, John 3:14-15)

The Marble Faun でも、青銅の教皇像を見上げたとき、ドナテロの眼は静かな希望に輝いた (“Donatello’s eyes shone with a serene and hopeful expression, while looking upward at the bronze Pope” 314) と叙述されている。

“I have heard,” remarked the Count, “that there was a brazen image set up in the Wilderness, the sight of which healed the Israelites of their poisonous and rankling wounds. If it be the Blessed Virgin’s pleasure, why should not this holy image before us do me equal good?” (315)

巡礼旅行の終着地点とも言える青銅の教皇像は、罪を赦す、慈愛に満ちた神の姿の表徴であると同時に、彼らの結婚を是認する権威者の表徴として機能しているのではないだろうか。

At this moment, it so chanced that all the three friends, by one impulse, glanced upward at the statue of Pope Julius; and there was

the majestic figure stretching out the hand of benediction over them, and bending down upon this guilty and repentant pair its visage of grand benignity. (323)

....

So, now, at that unexpected glimpse, Miriam, Donatello, and the sculptor, all three imagined that they beheld the bronze Pontiff, endowed with spiritual life. A blessing was felt descending upon them from his out-stretched hand; he approved, by look and gesture, the pledge of a deep union that had passed under his auspices. (324)

祝祷の手の下で、罪の呪いから解かれた二人に、結婚式のイメージさえ付与されている。このようにして、第二ラウンドとしての巡礼ロマンズもまたハッピーエンドの結末を迎えたと言える(神話的解釈において)。にもかかわらず、ホーソーンのドナテロの苦しみはまだ終わることがない。

7 . 悔悟者、路傍の楽園、カーニバル

ミリアムと和解をし、晴れ晴れしたはずの牧神も、また憂鬱な悔悟者に戻ってしまい、白衣をまとうと顔に無表情な覆面を付ける(43章)。しかし、47章になると、かつて二人がフォーンとニンフのように踊ったあのボルケーゼ公園に、時計の針が一回りしたように戻ってくる。“He has travelled in a circle, as all things heavenly and earthly do, and now comes back to his original self, with an inestimable treasure of improvement won from an experience of pain.” (434)

ミリアムの言葉によれば、フライのいう報償が、王女ミリアムを獲得しただけに終わらず、進歩と改善をも手に入れたという。そして、ミリアムの理解によれば、罪は祝福であり、素朴で未完成な魂を成長させる訓練の手段であるという。ここに、悪から善を生み出す神の摂理の思想(創世記 50:20)^{xvi}が垣間見られる。しかし、残念ながらそれを味わえる読者は少ない。

楽園(アルカディア)から出発したドナテロは、愛と進歩とを手に入れて、路傍の楽園(“a wayside Paradise” 435)にやってくる。しかし、それはオリジナルな楽園ではない。束の間の楽園でしかない。そして、彼らが真の楽園に帰還することはなく、彼らの人生が一生涯、罪の呵責に悩む人生であり、罪滅ぼしの一生であることをホーソーンが語る時、そこにホーソーン特有の文学世界が創造され、人間に対する彼のいつもの罪観が表出しているのを発見するの

みである。

龍退治のモチーフを中心に、フライの主張するロマンスの探究のテーマである、「(1)相克、(2)死、(3)主人公の失踪、(4)主人公の再現と認知」という四局面が、*The Marble Faun* の中に明確に組み込まれているのを検証してきた。しかしながら、また同時に、ホーソーンは結局、罪が赦されても罪の結果は残存するという、彼自身の信念をここでも崩すことができなかつたために、読者サイドからは読解しにくいロマンスに仕上がってしまった。

ドナテロは完璧な神話的人物になりきれなかつたし、とって、ヘンリー・ジェイムズが望むようなイタリア人の現実的青年も生まれなかつた。ホーソーンの視点は、ロマンスの背景の園に置かれた、たとえどんな理由があつたにしろ、罪を犯してしまった、そしてその罪に苦しむ青年であつた。

小説最後の3、4章が間延びしているという、誰もが感じる欠点についても、もう一組のカップルに結末を付ける必要があつたからである。このヒルダ・ケニヨン組は、ドナテロ・ミリアム組とは正反対の善人者カップルで、ホーソーンは彼らにこそ希望と明るさを託すのである。

〔注〕

ⁱ Nathaniel Hawthorne, *The Marble Faun: or, The Romance of Monte Beni*, The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne, vol. 4 (Ohio, Ohio State UP, 1968).

ⁱⁱ R. W. B. Lewis, *The American Adam: Innocence Tragedy and Tradition in the Nineteenth Century* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1955) 117.

ⁱⁱⁱ Northrop Frye, *Anatomy of Criticism: Four Essays* (Princeton: Princeton UP, 1957. Paperback, 1971).

^{iv} Henry James, *Hawthorne* (New York: Doubleday & Company, Inc., 1879) 142.

^v James, 142.

^{vi} James, 143.

^{vii} James, 143.

^{viii} この作品の副題は“*The Romance of Monte Beni*”で、作品中“*Donatello—or the Count di Monte Beni*” (104) と書かれているところから、作者はドナテロを主人公と考えていたに違いない。

^{ix} 「ぶどう」の木は神に植えられたイスラエルの象徴とされ(詩 80:9)、キリストは自分をぶどうの木に喩えている(ヨハ 15:1)。最後の晩餐で、ぶどう酒は人類の罪を赦す新しい契約の象徴とも言われている(マタ 26:27-8)。「いちじく」もパレスチナの重要な果樹の一つで(民 13:23、マタ 7:16)、景観をそえ、その果実は生のまま、または乾燥させて食べられ(サム上 25:18)、干しいちじくは薬物的効果も有した(王下 20:7、イザ 38:21)。「オリーブ」もイスラエル人にとって重要な果樹で(出 23:11、申 6:11)、銀色に輝く葉は、パレスチナの特徴的な景観をなした。オリーブ油を取ったり(出 27:20)、生果は塩

漬けにして食用とし、木材は種々の工作に用いられた（王上 6:23, 31-3）。オリーブは繁栄、祝福、美の象徴で（詩 52:10, 128:3, エレ 11:16, ホセ 14:7）特にノアの洪水後、鳩がくわえてきたオリーブの新芽から平和の象徴と見なされるようになった（創 8:11）。「泉」は比喩的には、祝福の本源で（ヨエ 4:18）、罪を清める力があり（ゼカ 13:1）、回復と生気を与えるものとされている（黙 7:17, 21:6）。神が命の泉や生ける水の源（詩 36:10, エレ 2:13）に、また神の教えが命の泉に喩えられている（箴 13:14, ヨハ 4:14）。

^x 作品中でローマのユダヤ人地区などは、“a heap of Roman mud”（388）とさえ表現されている。

^{xi} モデル・アントニオがこのロマンスで如何に悪魔として描かれているかについては、拙論『『大理石の牧神』における悪魔』『キリスト教文学研究第11号』（日本キリスト教文学会、1994）参照。

^{xii} Frye, 150.

^{xiii} “Donatello was as gentle and docile as a pet spaniel”(43) “Miriam, Hilda, and the sculptor, were all three present, and, with them, Donatello, whose life was so far turned from its natural bent, that, like a pet spaniel, he followed his beloved mistress wherever he could gain admittance.” (131)

^{xiv} “She must have had cause to dread some unspeakable evil from this strange persecutor. . . .” (171)

^{xv} Frye, 192.

^{xvi} “But as for you, ye thought evil against me; but God meant it unto good, to bring to pass, as it is this day, to save much people alive.” (KJV, Genesis 50:20)

（1999年2月9日受理）